

## 「何の権威か」

2014年10月22日

**マルコによる福音書 11章 27節～33節。** 一行はまたエルサレムに来た。イエスが神殿の境内を歩いておられると、祭司長、律法学者、長老たちがやって来て、言った。「何の権威で、このようなことをしているのか。だれが、そうする権威を与えたのか。」イエスは言われた。「では、一つ尋ねるから、それに答えなさい。そうしたら、何の権威でこのようなことをするのか、あなたたちに言おう。ヨハネの洗礼は天からのものだったか、それとも、人からのものだったか。答えなさい。」彼らは論じ合った。「『天からのものだ』と言えば、『では、なぜヨハネを信じなかったのか』と言うだろう。しかし、『人からのものだ』と言えば……。」彼らは群衆が怖かった。皆が、ヨハネは本当に預言者だと思っていたからである。そこで、彼らはイエスに、「分からない」と答えた。すると、イエスは言われた。「それなら、何の権威でこのようなことをするのか、わたしも言うまい。」

主イエスは昨日、エルサレム神殿で献げ物を暴利で売る商人の台や腰掛をひっくり返す暴力事件を起こし、「祈りの家を強盗の巣にした」と抗議した。神殿当局は、支配している場所で、一介のラビ・イエスからメンツをつぶされ怒り心頭であったが、主イエスの抗議のパフォーマンスを支持する民衆の手前、手出しできないでいた。彼らは殺害の決意をさらに固めた。殺害の気運が満ちている中、主イエスは公然と神殿に現れた。すぐに、祭司長、律法学者、長老たちが取り囲み、どんな権威があつて神殿境内で暴力事件を起こしたのかと問うた。主イエスは問いに直接答えず、逆に問い返した。「一つ尋ねるから、それに答えなさい。そうしたら、何の権威でこのようなことをするのか、あなたたちに言おう。ヨハネの洗礼は天からのものだったか、それとも、人からのものだったか。」気迫のこもった激しい言葉で、生ける神を恐れよと悔い改めの洗礼を勧め、最期、領主ヘロデに殺されたヨハネは天から遣わされた預言者であると最大の尊敬を集めていた。ヨハネは天からのものと答えれば、なぜ信じなかったのかと言われ、人からのものと答えれば、民衆から激しい反撃を受ける。「分からない」と言って、彼らは返答することを避けた。主イエスは「それなら、何の権威でこのようなことをするのか、わたしも言うまい」と言い、論争は終わった。彼らの主イエスをやり込める意図は完全に潰された訳である。

主イエスと神殿当局者たちの論争は言葉を持つ者と持たない者との対比が鮮やかに描き出されている。主イエスは主体をかけた言葉と行動を持って、いつでもどこでも公然と振る舞ってきた。今、命が狙われているただ中においても、揺らぐことのない確信を持って言葉を発している。一方、神殿当局者たちは宗教的権威を持っていたが、その権威は「張子の虎」で、もろく崩れ去るものであった。自分たちの権威を保持するためにヨハネの真実を認めず、軽んじた彼らは、ヨハネの権威について「神からのもの」と意思表示をすることができない。しかし、民衆のヨハネに対する尊敬は絶大で、彼を「人からのもの」と否定的に言うこともできず、言葉を失ってしまった。

今日「沖繩基地」と「原発」が直近の問題である。沖繩に新しい基地を押し付けることに賛成の人は少ない。原発も命が脅かされる危険を知り、賛成の人も少ないだろう。しかし現実には、双方とも押し進められている。反対を意思表示できない苦渋の中にある人々のことを思う。自分たち仲間の利益のために、押し進める人々はいる。彼らは力を持っているが、人を大切にする真実な言葉を失った神殿当局と同質である。キリスト教は言葉の宗教である。主体的な言葉を回復するところに人間の尊厳と社会の健全さが生まれる。